

菊地先生の謎を知る一人の高橋良当君と会う機会があった。彼のお父上の刀剣に関して相談を受け、その際に以下のような菊地先生に関するお話を聞く。

1. 高校卒業後に菊地先生に相談に行き、親しくお付き合いをいただく。信州大学医学部に進学したが、夏には菊地先生推奨の小説を読む。感想を述べると例の調子で「ふふん」と言う感じで、それについて論じることはあまりない。
2. 先生とは何度が一緒に旅行もした。大学を卒業して東京に出てからは飲み屋、カラオケのお付き合いが続く。煙草片手にビールを好まれた。カラオケは演歌である。新宿2丁目、新小岩あたりで飲み、飲んだ時は終電まで飲んで帰宅。
3. 先生は千葉高の後は、県立船橋高校の定時制教師を長く務められる。千葉高時代に住んでいた稲毛のアパートから南船橋の公団に移り住まわれ、一度、南船橋の先生のお宅に伺ったことがある。部屋は勿論、風呂、トイレの中まで足の踏み場もない程の本で埋まっていたのを覚えている。結婚はされず生涯独身でした。
4. 先生は岩手の遠野の近くのお生まれであり、東北大学の文学部卒である。仙台にお姉さんが住んでおられる。
5. 「小説を書く」と言われていたが、最後まで書かれなかった。江戸文学が専門で、大手の雑誌などに論考を発表されていたと思う。（伊藤注：江戸文学 菊地久治で国会図書館の検索ページで探すもヒットせず、菊地久治郎がヒットする。この菊地久治郎は菊地先生のペンネームで、いくつか本を編集したり、論説を出したりしている。『日本における流血と死の哲学』「憎悪愛の技法―「婦系図」小論」など）
7. 作家では三島由紀夫が一番好きだったと思う。三島事件は自殺を残念がることなく肯定、乃至想定していたようだ。むしろ川端康成の自殺の時は残念がっておられた。（なお、高橋君は、三島事件の裁判を傍聴したそうである）
8. 水道橋の場外馬券売り場に向かう橋のところで行き倒れた。夜中に高橋君の自宅に電話がかかる。先生の手帳にある電話を片っ端から掛けて、その一本で高橋君の電話番号につながったということだと思う。警察からの問い合わせに対し、先生の職場、ご親族（お姉様が仙台におられること）を話し、その後は警察からも、ご親族からも一切電話もない。逝去の時に外向いたわけではなく、その警察からの電話だけである。恐らく、喫煙と飲酒後の心臓発作で逝かれたのだと思う。
9. 菊池先生はご自分を“先生”と呼ばれることをとても嫌っており、高卒後お付き合いが始まって間もなく“菊池さん”と呼ぶように注意されました。